



「東京大学下水道システムイノベーション研究室」の皆さん。  
右から、加藤裕之特任准教授、星野まさかさん（4年）、ファム ピエット ズン特任助教。  
※滝沢智教授が併任でメンバー

東京大学工学系研究科都市工学専攻

## 下水道システム イノベーション研究室

**水**に向き合う若き研究者や学生達の活動  
にスポットを当て、水を学ぶ楽しさと醍醐味を教えてもらう連載「水Lab.」。第9回は社会ニーズに対応した下水道システムの構築に向けた研究を行う「下水道システムイノベーション研究室」の皆さんに登場いただきます。下水道システムを活用してどのような社会を目指していくのか、それぞれの研究の目的についてお話を伺いました。

加藤先生

研究室の大きな目的は、

探っています。

加藤先生 これもまた、水産という

ら、私がやりたかった文系と理系が

融合した研究ができると考えたか

らです。私が卒論として取り組んで

いるのが、「汚泥肥料の地域での普

及プロセスについて」。汚泥肥料そ

のものについての研究だと理系分

野になりますが、普及プロセスな

り、経済学的な視点をプラスするこ

とができますから。

下水汚泥肥料の普及が盛んな地

域の方々にお話を聞くのと同時に、

社会学者のエヴァエレット・ロジャーベ

スの『イノベーション普及理論』と

比較して異なっている部分をあ

り出して、自分なりの理論を組み立

ていくのがこの研究の目的です。

加藤先生 既存のものと比較しつ

つ、課題を発見していくという視点

は非常に大切だし、私自身、こう

いった発想にはすこく刺激を受け

ます。下水道だから工学系と決めて

けるのではなく、これからもさまざま

な視点を持つ人や団体と協力し

ていけるような研究室で有り続け

たいと思っています。

**ズン先生** リサーチテーマの一つに下水道のシステムを使い、社会システムにイノベーションを起こすこと。多くの場合、新しいことは異分野との融合によって起きますよね。産官学はもちろん、市民などとの連携を通して、より社会のニーズに対応する新たな試みの提案を目指しています。また、私は官民連携（PPP）も研究テーマの一つにしていますが人材育成が最大の課題です。官と民を融合させつつ、それとの若手職員のモチベーションをいかに上げていくか。若い世代の水環境への関心が低くなっている中、ハードルは高いと感じることもありますが、経営学や社会学からのアプローチも含めてチャレンジしています。

**ズン先生** 私はベトナムの出身で、ハノイ国家大学で環境学を学んだ後、岡山大学、北海道大学、日越大学などで土壤微生物学・土壤物理学を学びました。現在は東京都砂町水再生センターで、下水の処理水を用いたアユの養殖実験を行っています。アンモニアなどの成分に弱いアユを養殖するためには、水質を適切なレベルで保つ必要があります。実験は夏から始まり、現在は第二期に入っていますが好調です。実験を通して、下水処理水や、下水処理設備を地域資源として活用する方法を

**星野さん** 私がこの研究室を選んだ理由は、ひとつは父が都の下水道局の職員だったためにこの分野に親しみがあったということです。そしてもうひとつは、「この研究室な

「水Lab.」に  
登場してくれる  
研究室を募集します。  
申し込みは  
[water-n.com/contact/](http://water-n.com/contact/)